

マルクスにとっての否定の否定の役割

「所有についての弁証法の戯画」の続き

——これらは、またしてもデューリング氏の自由な創造であり想像である。……

ところで——とエンゲルスはつづけて言う——「マルクスにあっては、否定の否定はどんな役割を演じているのか？ 七九一ページ〔第二四章、第七節、801ページ〕以下」（ロシア語版では648ページ以下）「に、彼は、それにさきだつ五〇ページ」（ロシア語版では三五ページ）「のなかでおこなってきた、いわゆる資本の本源的蓄積にかんする経済学的・歴史的研究の諸結論を総括している。資本主義時代以前には、すくなくともイギリスでは、労働者による自己の生産手段の私的所有を基礎とする小経営がおこなわれていた。いわゆる資本の本源的蓄積とは、この国では、これらの直接的生産者を収奪すること、すなわち、自己労働に立脚する私的所有を解消することであった。こういうことが可能になったのは、前述の小経営が、生産と社会との狭い、原生的な限界としか両立しえないものであって、したがって、ある高度に到達すると、それ自身の絶滅の物質的手段を生み出すからである。この絶滅、すなわち、個人的な、分散した生産手段の、社会的に集積された生産手段への転化が、資本の前史をなしている。労働者がプロレタリアに転化され、彼らの労働条件が資本に転化されるやいなや、資本主義的生産様式がひとり立ちするようになるやいなや、労働のより以上の社会化と土地その他の生産手段のより以上の」（資本への）「転化、したがって、私的所有者のより以上の収奪は、新しい形態を獲得する。『いまや収奪されるべきものは、もはや自営的な労働者ではなくて、多くの労働者を搾取する資本家である。この収奪は、資本主義的生産そのものの内在的諸法則の働きによって、すなわち資本の集積によって、なしとげられる。どの一人の資本家も、おのおの多くの資本家をうちころす。この集積にともなって、すなわち、少数の資本家による多数の資本家の収奪にともなって、たえず規模を増大する労働過程の協業的形態が、科学の工芸学への意識的応用が、土地の計画的な共同利用が、労働手段の、共同的にでなければ使用できない労働手段への転化が、生産手段を結合的・社会的労働の共同の生産手段として使用することによるすべての生産手段の節約が、発展する。この転化過程のいっさいの利益を横領独占する大資本家の数がたえず減少していくのにもなって、貧窮、抑圧、隷属化、墮落、搾取の量が増大する。だがまた、たえず膨脹しつつあり、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され、結合され、組織される労働者階級の反抗も増大する。資本は、それとともにまた、それのもとで開花してきた当の生産様式にたいする桎梏となる。生産手段の集積と労働の社会化とは、それ自身の資本主義的外被ともはや両立しえないような一点に到達する。この外被は破碎される。資本主義的私的所有の弔鐘となる。収奪者が収奪される。』〔803ページ〕

そこで、読者におたずねしよう。弁証法的にごたごたした錯綜とか、観念の唐草模様とかいうのは、どこにあるのか？ それによれば、けっきょく万事が一つことになるという、ごたまぜの、まちがい観念というのは、どこにあるのか？ 信者のための弁証法的奇蹟というものは、どこにあるのか？ デューリング氏に言わせると、それなしにはマルクスは彼の展開を仕あげることができないという、弁証法の秘法沙汰やヘーゲルのロゴス説に準拠した錯綜というものは、どこにあるのか？ マルクスは、かつて小経営がそれ自身の発展に

よって自己の廃絶……の諸条件を……生みだしたのとまったく同じに、いまや資本主義的生産様式もまた、自己の没落をもたらすべき物質的諸条件をみずから生みだしたということ、歴史的に実証して、ここで簡単に総括しているまでのことである。この過程は一つの歴史的過程であって、それが同時にまた弁証法的な過程であるにしても、そのことは、デューリング氏にとってどれほど不快であろうと、マルタスの罪ではない。

マルクスは、彼の歴史的＝経済的証明をなしおえてから、いまやはじめてそれにつづけて、つぎのように述べる。

『資本主義的生産・取得様式は、したがって資本主義的私的所有は、自己労働にもとづく個人的な私的所有の第一の否定である。資本主義的生産の否定は、この資本主義的生産そのものによって、自然過程の必然性をもって生みだされる。これは否定の否定である』うんぬん（さきに引用したとおり）。〔803ページ〕

だから、マルクスがこの過程を否定の否定と名づけているのは、この過程が歴史的に必然的なものであることを、それによって証明するつもりなのではない。その反対である。すなわち、彼は、この過程が実際に一部はすでにおこっており、一部はこれからおこらざるをえないということ、歴史的に証明したあとで、それにつけくわえて、この過程を、一定の弁証法的法則にしたがっておこなわれる過程と、名づけているのである。それだけのことである。だから、デューリング氏が、否定の否定はここでは過去の胎内から未来を分娩させる助産婦の役目をはたさせられているとか、あるいはマルクスは、否定の否定をよりどころとして土地と資本との共有制……の必然性を確信せよ、と要求しているとか、主張しているのは、これまたデューリング氏のまったくのなすりつけである。（125万ページ）〔第一四巻、255~262ページ〕

第一巻 「人民の友」とはなにか P168~170

コメント

マルクスにとっての否定の否定（弁証法的法則）の役割とは、発展過程が歴史的に必然的なものであることを、否定の否定によって証明するためではなく、この過程を否定の否定と名づけているのは、この過程が実際に一部はすでにおこっており、一部はこれからおこらざるをえないということ、歴史的に証明したあとで、それにつけくわえて、この過程を、一定の弁証法的法則にしたがっておこなわれる過程と言っているのである。